平成14年度　8020公募研究報告書抄録

報告書名：障害者の歯科疾患に関する検討

研究者名：石川　寛、上地智博、砂川英樹、當山　優、湖城秀久、真座　孝、城間　健、林　秀樹、
安里幸子、平塚正雄、小禄克子、比嘉香恵子、前田さおり、喜屋武　満
所　　属：沖縄県歯科医師会口腔衛生センター歯科診療所

【はじめに】

近年、高齢化社会の中で障害者施設においても、障害者の高齢化が進んでおり、その中で、障害者の歯科的健康管理においては、う蝕疾患とともに歯周疾患による歯の喪失が問題となってきている。そこで、当県の障害者の歯科疾患の実態を把握するため、県内の障害者施設のう歯と歯周組織の健診を行った。そのことよって、当県の障害者の歯周疾患の実態を把握し、障害者の口腔衛生管理を充実させることを目的とした。

【対象・方法・結果】

対象の障害者施設は２０施設、人数は８７５人であった。う歯に関しては「平成１１年度全国歯科疾患実態調査」（以下、全国）と比較した。当県障害者の「１人平均喪失歯数」は、全国に比べて多く、２０～６０歳の年齢階級で有意差が認められた。「１人平均ＤＦ歯数」は障害者が少なかったが、喪失歯数を加味した「１人平均DMF歯数」は障害者が多かった。また、う歯や、喪失歯の処置状況についても不十分さが認められた。障害別の比較では、ダウン症においては喪失歯が多く、３０歳の早期から歯を失う者が多かった。

歯周疾患についてはＣＰＩＴＮを診査した。対照は沖縄県歯科医師会が健診を実施した比較的大規模な健常者の事業所とした。事業所健診の受診者は２４１６人であった。ＣＰＩＴＮの重症度（１～４）は、健常者に比べて障害者のほうが高く、特に若年者（２０～４０歳）においてその差は著しく、ほとんどに有意差が認められた。障害別の比較では、てんかんの若年者（２０～３０歳）において、重症度３，４の者が多く、歯周疾患の罹患率が高い傾向が認められた。

【まとめ】

当県の障害者は全国と比較して喪失歯が多かった。また、う歯や、喪失歯の処置状況についても不十分さが認められた。

ダウン症は他の障害者と比較して、喪失歯が多かった。

障害者の歯周疾患（ＣＰＩＴＮ）の状態は、２０歳の早期から重症化する事が認められた。また、その重症度は健常者と比較して、２０～４０歳のほとんどにおいてに有意差が認められた。

障害別の比較では、てんかんの若年者（２０～３０歳）のＣＰＩＴＮの重症度が高く，有意差が認められた。

以上のことから、障害者の歯周疾患においては若年の早期から取り組まなければいけないことが示唆された。